

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：18001

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20010

研究課題名（和文）ロマンス諸語における語源U/Vの非唇歯音化の再解釈

研究課題名（英文）Reinterpretation of Non-Labiodentalization of the Etymological U/V in Romance Dialects

研究代表者

三島 庸平（Mishima, Yohei）

琉球大学・国際地域創造学部・講師

研究者番号：30961198

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、現代の方言資料と古い文献資料の分析を通してスペインとフランス南部のロマンス諸語における祖語ラテン語のU/V音の非・唇歯音化を再解釈することを目指す。その一環として、先行研究の問題点を指摘し、またラテン語U/V音の変化とF音の変化を一つの問題として扱う必要性を明らかにした。また、ラテン語F音の保持と変化の解明と、言語接触に基づく「階層理論」の理論的問題の解消を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の研究は、スペインとフランス南部におけるロマンス諸語の部分的な比較に留まり、その原因を十分に検証できていない。本研究は、当該地域のロマンス諸語全てを研究対象にすることで、ラテン語U/V音の非・唇歯音化の原因を体系的かつ網羅的に追求する。新しい比較研究の観点から当該の原因を検討すると同時に、個々のロマンス諸語における先行研究の成果を統合する。また、異なる言語の言語資料を同一の方法論で分析するだけでなく、近年に編纂された資料を用いることで新しい言語データを提供する。そのため本研究は、ラテン語からロマンス語への変遷に関する重要な基盤研究となり、ロマンス語の概説書等への貢献が期待される。

研究成果の概要（英文）：This study aims to reinterpret the non-labiodentalization of the Latin U/V sounds in the Romance dialects of Spain and southern France through an analysis of contemporary dialectal sources and older literary sources. In this process, a reexamination of previous studies confirmed the need to study the change of Latin U/V and F as a single issue. Furthermore, an attempt was made to elucidate the maintenance and change of Latin F sounds and to resolve the theoretical problems of the "stratum theory" ("teoria estratística" in Spanish) based on language contact.

研究分野：ロマンス語言語学

キーワード：ロマンス語 語源U/Vの非・唇歯音化 語源Fの保持と変化 通時音韻論 階層理論

## 1. 研究開始当初の背景

祖語ラテン語の U/V の発音が非・唇歯音化する言語現象はスペインのスペイン語ならびにアストゥリアス語、アラゴン語、ガリシア語と、フランス南部のガスコーニュ語に認められる。ラテン語 U/V 音の非・唇歯音化はそれらのロマンス諸語の起源に関わる問題とされ、なぜスペインとフランス南部のロマンス諸語に集中して当該の言語現象が生じたのかが議論される。その主な説明として、地域固有の先ローマ期言語の影響、あるいは祖語ラテン語の方言的特徴を共通の原因とする二つの説がこれまでに提示され、今日でも意見が対立している (Alonso 1962; Penny 1972)。こうした状況の中、筆者は、別の言語現象である祖語ラテン語の F 音の変化を研究した結果、先ローマ期言語の影響はスペイン語とガスコーニュ語で認められるが、ほかのロマンス諸語では議論の余地があることを明らかにした (Mishima 2020)。

しかしこれまで、スペインとフランス南部のロマンス諸語全てを包括する比較研究は行われていない。そのため、ラテン語 U/V 音の非・唇歯音化の原因を検討するにあたり次の点が不明なままである。

- (1) スペインとフランス南部のロマンス諸語のあいだにどのような類似点と相違点があるのか。
- (2) それぞれのロマンス語に個別の原因は存在しないのか。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、現代の方言資料と 8 世紀から 15 世紀の文献資料を基盤に、スペインとフランス南部のロマンス諸語に生じる祖語ラテン語の U/V 音の非・唇歯音化を比較研究の観点から記述・考察することで、その言語現象の原因について新しい解釈を提示することである。そのために次の三つを明らかにする。

- (1) それぞれのロマンス語におけるラテン語 U/V の通時的共時的な状態を明らかにする。
- (2) それらのロマンス諸語のあいだにある類似点と相違点を明らかにする。
- (3) それらの類似点と相違点が生じた原因を明らかにする。

## 3. 研究の方法

### (1) 現代の方言資料の分析

現代の方言資料を分析し、スペインおよびフランス南部を中心にラテン語語源の U/V の現在の発音状況を明らかにする。そのためにまず、現地調査に基づく既存の資料を収集する。次に、それらの資料から必要な言語データを抽出・整理し、各ロマンス語におけるラテン語 U/V の発音状況を記述する。一部地域では両唇音と唇歯音の発音が共存すると報告されていることから、発音の地理的分布が複雑であると予想される。それを解決するために、Adobe Illustrator を用いて言語地図を作成し、異なる発音の地理的分布を視覚的に記述する。

### (2) 古い文献資料の分析

8 世紀から 15 世紀の公証文書を中心とした文献資料を量的に分析することで、ラテン語文字 U/V の保持・揺れの状況を明らかにすると同時に、その発音状況を推定する。まず文献資料は、スペインおよびフランスでの資料収集に加えて、刊行済みの文献編集集とオンラインデータベースを通じて集成する。次に、ラテン語文字 U/V と他の文字との混同に着目しつつ、分析対象となる語全てを抜き出す。それぞれの語における文字の保持・揺れの事例数を割り出し、各言語地域におけるそれらの年代的推移を表とグラフで記述する。

### (3) 類似点と相違点の明確化と新しい解釈の提示

上記二つのデータを分析することで、ラテン語 U/V 音の非・唇歯音化を共有するロマンス諸語の類似点と相違点を明らかにする。次に、本研究の知見とともにラテン語や先ローマ期言語、言語変化理論に関する近年の研究動向を踏まえて、ラテン語 U/V 音の非・唇歯音化の原因に関する既存の説明を再検討し、新しい解釈を提示する。

## 4. 研究成果

(1) 基層理論、傍層理論、上層理論は、接触する言語を「基層(言)語」、「傍層(言)語」、「上層(言)語」に分類し、それらの相互的影響を論じることで言語変化の説明を試みる。これらの理論は、共通して地理学の「層」を参考にしたものであるが、それぞれ異なる形で提唱されたために一貫性に欠けていた。そこでそれらの理論を「階層理論」(スペイン語 *teoría estratística* [González Ollé 2008]) と呼称することで一つの理論として捉え、ロマンス語研究の観点から基層語、傍層語、上層語の概念の統一を試みた。同時に、言語変化に基層理論を適用するための新し

い条件の提案を行った。従来の研究では、傍層語は2つ以上の「言語」の社会的地位が同等であることが分類の基準とされていたのに対して、基層語と上層語は「征服」という文脈のなかで「社会グループ」の社会的地位が基準とされていた。これに対して筆者は、基層語、傍層語、上層語の分類は一貫して「言語」の社会的地位を基準にして行うことを提案した。また、基層理論の適用条件に関しては、基層語の影響が想定され得ない地域の言語に同一の言語変化が認められる点に着目し、共通の祖語を持つ場合、問題となる言語変化の推定年代の違いが基層理論を適用するための条件の一つになりうることを主張した。本研究成果は、2023年に論文として日本ロマンス語学会が発行する学術雑誌『ロマンス語研究』の56号に掲載された。

(2) /f/が気音/h/になる変化はいくつかのロマンス語に認められ、それらの言語比較や形式音韻論によって当該変化の音韻コンテキストは明らかになっていたが、/f/の保持のそれは十分に明らかになっていなかった(地域に応じて祖語ラテン語のF音が唇歯音/f/であったか両唇音/ɸ/であったかは議論されるが、一般的にラテン語で受け入れられている/f/を用いた)。そこで筆者は、音声変化の音韻環境とその変化の地理的広がりに着目しつつ、/f/が/h/になっている複数のロマンス語を比較することで、/f/の保持傾向が強い音韻環境を明らかにした。また、これを明らかにすることによって、原初期のスペイン語地域では/f/の保持に地域差があり、/f/の保持の音韻状況は現代スペイン語のそれと大きな違いがなかったことを主張した。本研究成果は、2023年に論文としてスペインのスペイン語史学会(Asociación de Historia de la Lengua Española)が発行する学術雑誌 *Revista de Historia de la Lengua Española* (『スペイン語史』)の18号に掲載された。

(3)(2)で言及した/f/→/h/の変化を説明する際、それが共通の原因によって、あるいは固有の原因によって生じたのかが議論されてきたが、それらのロマンス諸語を網羅した比較研究は行われてこなかった。そこで筆者は、当該変化が認められるロマンス語全てを対象に通時的共時的な視点から比較を行い、原因の検証を試みた。分析の結果として、スペイン語とガスコニュ語は先ローマ期言語の影響が認められるが、その言語は同一ではないこと、またそのほかのロマンス諸語では先ローマ期言語の影響は認められず、言語の内的要因によって変化が生じたことを明らかにした。本研究成果は、*Actas del XII Congreso Internacional de Historia de la Lengua Española* (『スペイン語史第12回国際大会議事録』)で採択され掲載予定である。

(4)今日のロマンス諸語の多くでは唇歯音/v/が発音されるのに対して、スペインとフランス南部のロマンス諸語では両唇音/β/ (または/b/)が広く一般化している(イベリア半島内ではポルトガル、カタルーニャ、バレンシアの一部地域に/v/が観察される。/β/はサルデーニャの中東部とイタリア南部にも認められる)。イベリア半島のロマンス諸語の/v/の不在に関しては様々な説明が提唱されてきたが、先行研究では、当該地域のロマンス諸語全てを対象にした比較研究が行われていない上に、/v/の不在と密接に関係する/f/の変化が十分に考慮されていなかった。そのため筆者は、/f/→/h/の音変化研究(Mishima 2020)を基盤に、スペイン北部とフランス南西部のロマンス諸語における/v/の不在に関する先行研究を見直し、その問題点を明らかにした。また、ラテン語からロマンス語への通時音韻論の観点から、唇歯音が両唇音になる現象を「両唇音化」「bilabialization」(e.g. /v/→/β/)、両唇音が唇歯音になる現象を「唇歯音化」「labiodentalization」(e.g. /β/→/v/)と定義することに加え、両唇音が唇歯音化しない現象を「非・唇歯音化」「non-labiodentalization」(e.g. /β/→/β/)とすることを提案した(“non-labiodentalization”の訳語が定まらず、科研費研究課題名などの一部では「非唇歯音化」と記載した)。本研究成果は、2023年10月に開催された日本イスパニヤ学会第69回大会で報告した。

(5)上記4点に加えて、本研究期間中に完遂することはできなかったが、研究の基礎となる先行研究の整理、言語資料の収集、資料の分析を一部終えたことも研究成果としたい。

#### <引用文献>

- ALONSO, Dámaso (1962): *La fragmentación fonética peninsular*, Madrid: CSIC.  
GONZÁLEZ OLLÉ, Fernando (2008): “Aportaciones a los orígenes de la lengua española”, in B. Díez Calleja (ed.): *El primitivo romance hispánico*, Burgos: Instituto Castellano y Leonés de la Lengua, pp. 13-72.  
MISHIMA, Yohei (2020): *El cambio de la F etimológica en oralidad y escrituralidad desde las perspectivas actuales de la lingüística románica*, Doctoral Thesis, Universitat de València, 947p.  
PENNY, Ralph (1972): “The Re-Emergence of /f/ as a Phoneme of Castilian”, *Zeitschrift für Romanische Philologie*, 88, pp. 463-482.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

|                                                                                    |                    |
|------------------------------------------------------------------------------------|--------------------|
| 1. 著者名<br>Mishima, Yohei                                                           | 4. 巻<br>18         |
| 2. 論文標題<br>El contexto fonologico del mantenimiento de la F etimologica en espanol | 5. 発行年<br>2023年    |
| 3. 雑誌名<br>Revista de Historia de la Lengua Espanola                                | 6. 最初と最後の頁<br>9-34 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.54166/rhle.2023.18.01                                | 査読の有無<br>有         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                                              | 国際共著<br>-          |

|                                       |                      |
|---------------------------------------|----------------------|
| 1. 著者名<br>三島庸平                        | 4. 巻<br>56           |
| 2. 論文標題<br>基層言語、傍層言語、上層言語と基層理論の適用条件   | 5. 発行年<br>2023年      |
| 3. 雑誌名<br>ロマンス語研究                     | 6. 最初と最後の頁<br>95-110 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし         | 査読の有無<br>有           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>-            |

|                                                                                                                       |                 |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>Mishima, Yohei                                                                                              | 4. 巻<br>-       |
| 2. 論文標題<br>Una nueva perspectiva actualizada sobre el cambio de F > /h/ a partir de la linguistica romanica historica | 5. 発行年<br>2024年 |
| 3. 雑誌名<br>Actas del XII Congreso Internacional de Historia de la Lengua Espanola                                      | 6. 最初と最後の頁<br>- |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                                                                                         | 査読の有無<br>有      |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                                                                                | 国際共著<br>-       |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

|                                                                       |  |
|-----------------------------------------------------------------------|--|
| 1. 発表者名<br>三島庸平                                                       |  |
| 2. 発表標題<br>スペイン北部とフランス南西部における唇歯音 /v/ の不在—/f/ > /h/ の音変化研究からみる再解釈の必要性— |  |
| 3. 学会等名<br>日本イスパニヤ学会第69回大会                                            |  |
| 4. 発表年<br>2023年                                                       |  |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|  | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|